

韓国の帰国生の学校生活におけるストレスと滞在国による差異

—アメリカ・日本・中国からの帰国生を中心に—

朴 エスター*

Korean Returnee Students' Stress in their School lives Classified by the Countries Where They Stayed Abroad

: Focusing on the Korean returnee students from the U.S.A., Japan, and China

PARK Esther

abstract

This research aims to clarify the stress structure of Korean returnee students from the United States, Japan and China and also aims to examine how the characters of stresses vary according to the returnee students' host countries and attribute factors (duration of stay and gender). I have conducted questionnaires of 165 returnee students from the United States, Japan and China who attend Korean junior and senior high schools, thereafter coming up with a statistical analysis.

As a result of having examined the differences in stresses according to returnee students' host countries and attribute factors, it was known that those who had stayed overseas more than 36 months were more prone to stress in the categories such as 'dissatisfaction with teachers' and 'negative reaction to the experience in one's home country' than those who had stayed less than 36 months. As in the category 'difficulty in dealing with the class culture enforcements', it became clear that the returnee students from the United States get more stress than those from Japan. In addition, it was known that the returnee students from the United States were more likely to get stress from 'discord with friends' compared to those from China, and the female students were more likely to get stress from 'negative reaction to the experience in one's home country' compared to male students.

Key words: Korean returnee students from the U.S.A., Japan, and China, Countries where the returnee students stayed abroad, School lives, structure of Stress, differences of Stress

1 研究背景と問題の所在

韓国では経済成長とグローバル化により海外での学校生活を経て帰国後韓国の学校に通う学齢期の子どもたちが年々増加している。2002年度から2009年度までの間の韓国における帰国生¹の数はおよそ14万人に上り（2011年度韓国教育開発院教育統計センター）、今後もその数は増加傾向にあるといえる。また、このような帰国生の量的な増加とともに質的な側面も多様化している。その要因の一つとして滞在国²が挙げられる。同じ帰国生といっても一人ひとりの滞在国や滞在国での経験は様々であるため、帰国生の学校生活を考える時、滞在国要因を

キーワード：アメリカ・日本・中国からの韓国の帰国生、滞在国、学校生活、ストレスの構造、ストレスの差異

*平成21年度生 比較社会文化学専攻

考慮する必要がある(朴, 2011)。しかし、これまではそのような子どもたちの帰国後の学校生活に関する教育・研究において滞在国要因はあまり注目されてこなかった。そこで、本研究では、帰国生の学校生活におけるストレスの背景要因として滞在国に着目し、滞在国の中でも帰国生数が最多を占めるアメリカ、帰国生数が安定的な日本³、近年帰国生数の増加が顕著な中国からの帰国生を取り上げる。

2 先行研究と研究目的

以下では、社会心理学におけるストレス研究、学校生活上の帰国生のストレス研究及び帰国生の滞在国に関する問題について概観し、それらを踏まえ本研究の目的を述べる。まず、ストレスについては、Lazarus & Folkman (1984) は、ストレスの系統的なとらえ方を提唱し、環境と個人という関係に注目してストレスを定義している。それによると、「心理的ストレスとは、人間と環境との間の特定な関係であり、その関係とは、その人の原動力 (resources) に負担をかけたり、資源を超えたり、幸福を脅かしたりすると評価されるもの」である。また、ストレス状態を誘発させるさまざまな刺激はストレッサー(菊住, 2007)であり、Dalton, J., Elias, M.J., & Wandersman, A. (2001) によると、ストレッサーには以下の4つの種類がある。それは、①死別や失職などについての標準化されたリストである「社会再適応尺度 (Social Readjustment Rating Scale)」によって測定される重大なライフイベント (Major Life Events)、②短期間の小さな出来事を含むストレッサーに焦点を置く日常的な苛立ち (Daily Hassles)、③長期間に及ぶ生活状況の変化に当たる人生の転換期 (Life Transition)、④長期にわたる資源の不足による周囲環境/慢性ストレッサー (Ambient/Chronic Stressors) である。これらのストレッサーの中で帰国生の学校生活上のストレッサーは、滞在国から韓国に戻ってきたことで文化移行を経験し、海外の学校から韓国の学校に戻るため、それぞれ社会再適応尺度の中の「生活の変化」及び「転校」に該当することから①重大なライフイベントに当てはまるといえる。また、帰国後新しい学校に転入するという側面では帰国生本人にとっての③人生の転換期であり、帰国後の期間が経つに連れ学校生活の中でのさまざまな環境要因がストレッサーとなり得ると考えられる。さらに、韓国の学校の過度な競争体制や過重な勉強時間による慢性病も予想されることから、④周囲環境/慢性ストレッサーに当てはまる。

次に、帰国生のストレス研究と帰国生の滞在国に着目した研究について概観する。まず、帰国生のストレスに関する先行研究として、箕浦 (1985) は、帰国生特有の学校ストレス発生の背景と小・中・高・大学別の年齢段階によるストレスを検討した。その中で、「日本の学校での居心地の悪さは、どの年齢段階で、どのくらい相手国に滞在し、どのような生活をしてきたか」によるとしている。森吉 (1999) では、帰国中学生を対象に質問紙調査を行った結果、帰国時年齢が高いほどストレス度が強く、滞在期間が4年以上で帰国時年齢が10歳以上の群が帰国後のストレス度と最も相関が強い結果となった。朴 (2010) は、中学校、高等学校に在籍する韓国の帰国生を対象に学校生活におけるストレスとその関連要因を検討した。因子分析の結果、ストレスとして『教師への不満』『学業困難』『友人との不和』『規則遵守への強制』の4因子が抽出された。ストレスの関連要因としては、韓国の学校に対する帰国前の期待と帰国後の実際との落差を示す期待の落差度が挙げられており、ストレスには期待の落差度・現在の年齢が有意に影響している結果となった。しかし、これらの研究ではストレスの背景として滞在国要因は言及されておらず、検討の余地がある。

また、小学校に在籍している帰国生のストレス・コーピングに関する調査研究にはKim (2002) やPark (2003) がある。Kim (2002) は、帰国クラスに在籍する帰国生と一般生を対象に生活ストレス・コーピング・自己効力感・社会的支持が児童の適応に及ぼす影響を調査した。その結果、これらの変数において滞在期間による有意差は認められず、父母と友人の社会的支持と帰国生自身の自己効力感が高く、積極的なコーピングをとる生徒ほど、よく適応するとしている。一方、Park (2003) は、一般生と帰国生を比較した結果、教師との対人関係においては帰国生の方がストレスが少なく、相手に合わせて妥協するコーピングにおいては帰国生の方がストレスを多く感じていた。さらに、帰国生の性別による日常ストレスの差異は認められなかったが、コーピングにおいて男子は気分転換を、女子は援助希求をより多くしていた。しかし、これらは帰国小学生のみを対象としているため、対象者を広げることでより多くの現状を明らかにすることが可能であるといえる。

さらに、帰国生の滞在国・地域に焦点をあてた先行研究としては、以下のようなものがある。箕浦 (1984,

2003) は、日米の対人関係処理様式の相違からもたらされる日本人帰国生の不適応事例を報告し、アメリカからの帰国生のアイデンティティ形成過程を検討した。また、Jeong & Joo (2003) は、アメリカを中心とした欧米からの帰国中学生の適応に影響を与える三つの領域として「友だち」「学業」「教師」を挙げている。一方、滞在国内・地域別の比較を行った研究には、布施 (2000) ; Yoon (2006) ; 朴 (2011) がある。まず、布施 (2000) は、シンガポール・ドイツ・アメリカ在住の日本人家族を対象に調査を行ったが、「環境」「日常生活」「子どもの教育」において国による特定の傾向は示されなかった。Yoon (2006) は、アメリカ・アジア・ヨーロッパの帰国生の感じる不安は滞在国内別に有意な差がなく、うつ傾向を示す尺度得点においてはアジアからの帰国生の方が西欧からの帰国生より高いことを示した。朴 (2011) は、韓国の帰国生が学校生活の中で不快と感じる経験は滞在国内別にどのような相違があるかを質的に分析した。その結果、滞在国内別の相違点として、アメリカからの帰国生は英語ができることを当然とする偏見に対し不快な感情を抱いていた。また、日本からの帰国生は韓国の反日感情によって日本が悪く言われることに、中国からの帰国生は、経済的な要因により中国の文化や人が蔑視されることに対し不快と感じていることが分かった。一方、不快な経験の中で滞在国内に共通する点としては、特別入試により帰国後恩恵を受けているという周囲の学業面での不当な扱いが挙げられている。

しかし、この結果は対象者の数⁴が限られており一般化できないため、量的な調査を行い帰国生の滞在国内別に把握する必要がある。また、このような不快感が長期間に及ぶ場合には、それが学校生活上のストレス源になり得る (朴, 2011) と考えられる。このような現状から、これらの国々からの帰国生のストレス構造及び滞在国内によるストレスの傾向を示す必要があると考える。そこで、本研究では、韓国におけるアメリカ・日本・中国からの帰国生 (以下、それぞれアメリカ帰国生、日本帰国生、中国帰国生とする) が現在の学校生活において感じるストレスはどのようなものか、ストレスの構造を明らかにし、その上で滞在国内別のストレスの差異を実証的に検討することを目的とする。その際、滞在国内とともに属性要因によるストレスの差異も併せて検討する。

3 研究課題

ここでは、上述した朴 (2010, 2011) の結果を踏まえ、研究課題を立てる。まず、帰国生のストレス構造については、以下のようなことが考えられる。本研究は帰国生の学校生活におけるストレスを検討した朴 (2010) とは対象者が異なり、対象者の滞在国内を三カ国に限定している。また、本研究と同様にアメリカ・日本・中国帰国生を対象とした朴 (2011) からは、国別に事例の数や内容の詳細に差はあるものの、帰国生のストレスの背景と考えられる滞在国内による不快な経験と特別入試による不当な扱いを示す事例が共通して見受けられ、ストレス構造において朴 (2010) で抽出された因子とは異なる新たな因子が抽出される可能性がある。これらのことから、「研究課題 1 アメリカ・日本・中国帰国生の現在の学校生活におけるストレスはどのようなものか」ストレスの構造を再度検討する必要がある。次に、滞在国内別のストレスの差異に関しては、朴 (2011) の質的分析では滞在国内別の不快な経験の内容において、国別に差異が見られ、帰国生の学校生活上のストレスや適応に属性要因が関連するとしている先行研究の知見 (箕浦, 1985 ; 森吉, 1999 ; Kim, 2002 ; Yee, 2008 ; Lee, 2009 ; 朴, 2010) から、「研究課題 2 滞在国内と属性によってアメリカ・日本・中国帰国生の現在の学校生活におけるストレスには差異があるか」について検討する。

4 研究方法と手続き

4-1 予備調査 2007年12月から2008年2月にかけて韓国のアメリカ帰国生、日本帰国生、計9名を対象に半構造化インタビューを行った。インタビューは出国前、海外滞在国内時、帰国後の流れに沿って家庭生活と学校生活に関する質問を行った。インタビュー内容をすべて文字化し、KJ法で分析した結果、滞在国内別に学校生活において異なる心理的様相が見られた⁵ため、本調査では帰国生の学校生活におけるストレスの滞在国内別の差異に着目した。

4-2 質問紙作成 質問紙⁶は、現在の学校生活におけるストレス、フェイスシートと帰国前後の韓国の学校に

に対する期待の落差度（朴, 2010）、滞在国に対する好意度、滞在国と韓国の類似度から成る。本研究は帰国生のストレスと滞在国及び属性要因を分析する。

4-3 対象者・調査時期・調査手続き 韓国の3都市にある中学校14校、高等学校13校に在籍する帰国生を対象に2008年7月上旬から質問紙を配布し、8月上旬までに回収を行った。配布数は400部、回収数は328部で、回収率は82%であった。しかし、国別の回答者のうち日本帰国生の有効回答数が少なかったため、2009年11月から2010年2月に拠点となる2校に追加調査を依頼した。拠点校2校の協力により、さらに8校からの協力も得て、計10校で調査を実施し、最終的に43部を回収した。2回の調査の回答のうち、アメリカ・日本・中国からの帰国生数の合計は165名であった。分析にあたってはSPSS ver.16.0を用いて統計的な分析を行った。また、本研究では帰国生の滞在国要因に着目しているため、滞在国別の属性を把握する必要がある。そこで、対象者の10の属性について滞在国別のクロス集計を表1に示す。

表1 アメリカ・日本・中国からの帰国生の属性一覧

人数 (%)		全体 165名(100%)	アメリカ帰国生	日本帰国生	中国帰国生
1. 性別	女子	87(52.7)	51(67.1)	27(54.0)	9(23.1)
	男子	75(45.5)	24(31.6)	23(46.0)	28(71.8)
	不明	3(1.8)	1(1.3)	0(0)	2(5.1)
2. 滞在国			76(46.1)	50(30.3)	39(23.6)
3. 現在の学校	中学校1年生	13(7.9)	8(10.5)	1(2.0)	4(10.3)
	2年生	11(6.7)	7(9.2)	1(2.0)	3(7.7)
	3年生	6(3.6)	2(2.6)	1(2.0)	3(7.7)
	高等学校1年生	36(21.8)	21(27.6)	10(20.0)	5(12.8)
	2年生	42(25.5)	17(22.4)	22(44.0)	3(7.7)
	3年生	57(34.5)	21(27.6)	15(30.0)	21(53.8)
4. クラス	一般クラス	143(86.7)	66(86.8)	50(100)	27(69.2)
	帰国生クラス	14(8.5)	9(11.8)	0(0)	14(8.5)
	不明	8(4.8)	1(1.3)	0(0)	7(17.9)
5. 出国時年齢 (数え年)	9歳未満	33(20.0)	13(17.1)	17(34.0)	3(7.7)
	9歳以上11歳未満	20(12.1)	8(10.5)	5(10.0)	7(17.9)
	11歳以上	104(63.0)	49(64.5)	28(56.0)	27(69.2)
	不明	8(4.8)	6(7.9)	0(0)	2(5.1)
6. 帰国時年齢 (数え年)	10歳～13歳	39(23.6)	19(25.0)	16(32.0)	4(10.3)
	14歳～16歳	53(32.1)	29(38.2)	14(28.0)	10(25.6)
	17歳～19歳	65(39.4)	22(28.9)	20(40.0)	23(59.0)
	不明	8(4.8)	6(7.9)	0(0)	2(5.1)
7. 滞在期間	12ヶ月以上36ヶ月未満	71(43.0)	52(68.4)	12(24.0)	7(17.9)
	36ヶ月以上	94(57.0)	24(36.1)	38(76.0)	32(82.1)
8. 帰国後期間	1ヶ月以上1年まで	66(40.0)	19(25.0)	21(42.0)	25(64.1)
	1年1ヶ月以上2年まで	37(22.4)	22(28.9)	4(8.0)	24(30.8)
	2年1ヶ月以上4年まで	32(19.4)	22(28.9)	9(18.0)	1(2.6)
	4年1ヶ月以上8年まで	29(18.2)	13(17.1)	16(32.0)	1(2.6)
9. 出国動機	親の派遣同行	120(72.7)	47(61.8)	41(82)	32(82.1)
	本人の留学 (早期留学)	26(15.8)	17(22.4)	6(12)	6(15.4)
	親の留学	14(8.5)	7(9.2)	3(6)	1(2.6)
	その他	3(1.8)	3(3.9)	0(0)	0(0)
	移民	2(1.2)	2(2.6)	0(0)	0(0)
10. 滞在国での在籍校 (複数回答)	現地校	116	76	34	16
	インターナショナルスクール	49	0	21	28
	韓国人学校	25	0	21	4
	韓国語学校	12	5	1	6
	その他	2	0	0	2

5 研究結果

5-1 アメリカ・日本・中国からの帰国生の現在の学校生活におけるストレス

研究課題1では、帰国生の現在の学校生活におけるストレス（以下、ストレス）はどのようなものかを把握するために米・日・中からの帰国生の回答に基づきストレス尺度に関する因子分析を行った。主因子法で初期値を求めた後、固有値1以上で因子の数を決め、プロマックス回転を行った結果、29項目による5因子が抽出された。その結果を表2に示す。

表2 韓国の帰国生の学校生活におけるストレス（アメリカ・日本・中国からの帰国生を中心に）－因子分析の結果

	F1	F2	F3	F4	F5
第1因子 学業困難					
試験や通知表の成績が悪かった	.834	-.045	.071	-.047	0.000
先生や両親から期待されたような成績がとれなかった	.832	-.146	.095	.073	-.091
一生けんめい勉強しているのに、成績がのびなかった	.763	-.030	-.067	-.012	-.060
試験や成績のことが気になった	.719	-.104	.139	.045	-.009
授業の内容や先生の説明がよくわからなかった	.710	.192	-.189	-.113	.025
試験をたくさんやらされて、勉強がたいへんだった	.628	.035	.028	-.009	-.031
人が簡単にできる問題でも、自分にはできなかった	.605	.225	-.008	.030	.042
授業中、指名されても答えることができなかった	.522	.047	-.018	.033	.070
授業で用いる韓国語が分からなかった	.479	.198	-.127	-.064	.078
第2因子 教師への不満					
先生から、自分と他人を比べるような言い方をされた	-.069	.822	.022	.057	.030
先生にうらぎられた	.033	.715	.044	-.349	-.033
先生が自分を理解してくれなかった	.110	.701	-.040	.035	-.048
先生から無視された	.081	.660	-.027	.128	.046
先生がえこひいきをした	-.074	.644	.052	.270	-.088
先生から厄介者扱いされた	.074	.615	-.024	.084	.027
自分は悪くないのに、先生からしかられたり注意されたりした	-.108	.398	.078	.284	.071
第3因子 友人との不和					
誰かにいじめられた	-.088	.061	.883	-.020	-.022
クラスの友だちから仲間はずれにされた	-.045	.074	.855	-.071	-.036
友だちから暴力をふるわれた	-.020	-.033	.703	-.007	.016
顔やスタイルのことで友だちからかわれたりばかにされたりした	.144	-.080	.655	-.001	.047
自分の性格のことや自分のしたことについて、友だちから悪口を言われた	.146	.084	.448	.206	.094
第4因子 教室文化への強制					
規則をやぶったからしかられた	.055	-.098	-.074	.884	-.043
服装や髪型について注意された	.038	-.089	-.006	.778	-.017
遅刻をしないように時間をきちんと守るように注意された	-.094	.089	.004	.625	.003
先生が語学の授業中に友だちの前で教科書を読ませた	-.024	.155	.043	.408	.029
第5因子 帰国体験への否定的評価					
友だちが滞在国や滞在国の人々のことを悪く言った	-.044	-.018	.021	-.146	1.026
先生が滞在国や滞在国の人々を悪く言った	-.015	-.042	-.133	.225	.691
帰国生であることで得をしていると友だちから妬まれた	-.044	.127	.088	-.069	.504
友だちから滞在国について答えに困るような質問を受けた	.251	-.159	.130	.053	.351
全体の説明率 (%)	22.565	33.522	42.788	48.755	52.385
α 係数	.885	.862	.797	.758	.722

第1因子は「試験や通知表の成績が悪かった」など学業に関する9項目から成るため『学業困難』と命名した。第2因子は「先生から、自分と他人を比べるような言い方をされた」など教師との関係からのストレスを示す7項目から成り『教師への不満』と名づけた。第3因子は「クラスの友だちから仲間はずれにされた」など友人とのトラブルを示す5項目から成るため『友人との不和』と名づけた。第4因子は「規則をやぶったからしかられた」などの学校の規則や授業中に滞在国の言葉で教科書を読むことを強いられる様子を示す4項目から成り、『教室文化への強制』と命名した。第5因子は「友だちが滞在国や滞在国の人々のことを悪く言った」など滞在国に関することや帰国生であることを否定的に言われることによるストレスを示すことから『帰国体験への否定的評価』と名づけた。以上の結果について因子的妥当性及び信頼性を検討するため、各因子のクロンバックの α 係数を求めた結果、全ての因子において、.7以上の高い一貫性が認められた。

5-2 アメリカ・日本・中国からの帰国生の現在の学校生活におけるストレスの差異

研究課題2では、滞在国と属性によって三カ国からの帰国生のストレスに差異があるかについて分析を行った。そのためにまず、各因子の下位尺度得点（平均値）を算出した。そのうえで、属性要因（「現在の年齢」「出国時年齢」「帰国時年齢」「滞在期間」「帰国後期間」）（箕浦, 1985；森吉, 1999；Kim, 2002；朴, 2010）とストレス5因子の相関を求めた。その結果、属性の「滞在期間」のみストレスの『帰国体験への否定的評価』と正の相関（ $r = .229, p < .01$ ）が認められた。この結果から、ストレスの差を検討する際、三カ国の滞在国要因とともに属性の「滞在期間」を取り上げる。また、これまで帰国生のストレスや適応に関連する要因として先行研究（Yee, 2008；Lee, 2009）で取り上げられてきた性別要因も併せて検討する。

次に、ストレスを従属変数、滞在国と滞在期間（36ヶ月未満・36ヶ月以上）を独立変数とした2要因分散分析を行った。有意差が認められた因子の詳細を図1に示す。その結果、第一に、ストレスの『教師への不満』については、滞在期間による主効果（ $F(2,155) = 4.56, p < .05$ ）が認められた。つまり、滞在期間が36ヶ月以上の帰国生の方が36ヶ月未満の帰国生より教師への不満が多く、よりストレスを感じていると言える。第二に、『教室文化への強制』においては、滞在国による主効果（ $F(2,158) = 5.03, p < .01$ ）が認められた。これについてTukey（以下、省略）を用いた多重比較を行った結果、日本帰国生に比べアメリカ帰国生の方が教室文化を強制されることに対しより多くのストレスを感じている傾向（ $p < .01$ ）が明らかとなった。第三に、『帰国体験への否定的評価』においては滞在期間による主効果（ $F(1,157) = 4.99, p < .05$ ）が認められた。これは、滞在期間が36ヶ月以上の帰国生の方が36ヶ月未満の帰国生より帰国生体験に対し否定的評価を受けることによるストレスを多く感じていることを示す。

さらに、ストレスを従属変数、滞在国と性別を独立変数とした2要因分散分析を行った。有意差が認められた因子の詳細を図2に示す。その結果、第一に、『友人との不和』においては、滞在国による主効果（ $F(2,154) = 3.17,$

図1 滞在国と滞在期間によるストレスの差－2要因分散分析の結果

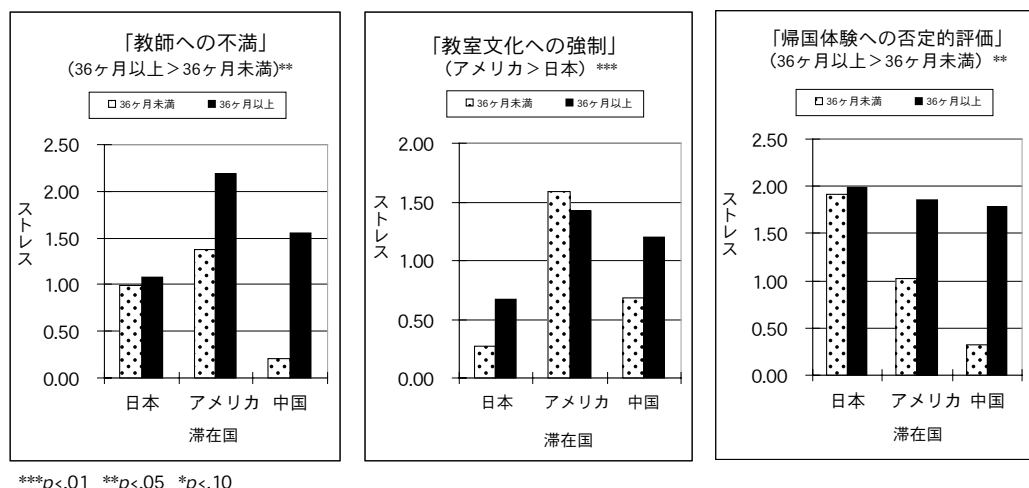
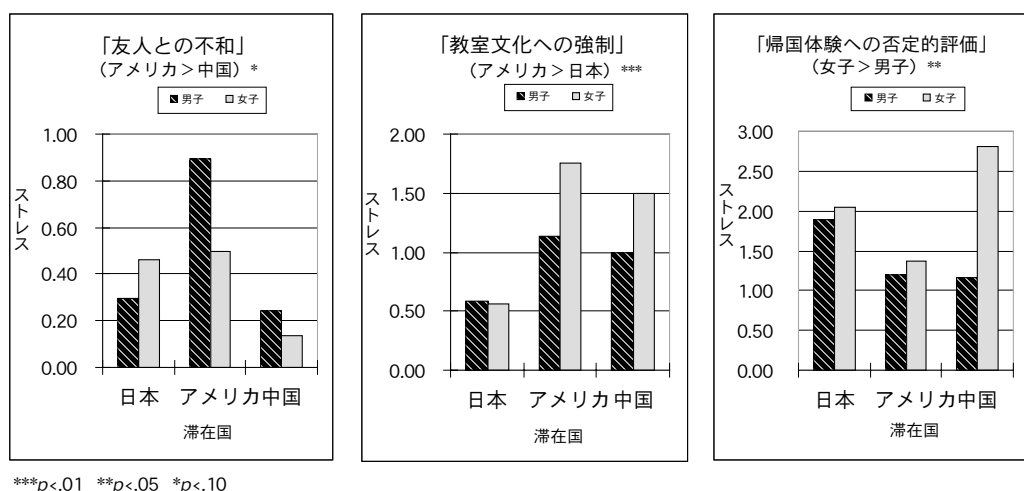


図2 滞在国と性別によるストレスの差－2 要因分散分析の結果



$p < .05$) が認められた。多重比較を行った結果、友人関係において、中国帰国生に比べアメリカ帰国生の方がより多くのストレスを感じている傾向 ($p < .10$) が示された。第二に、『教室文化への強制』においては、滞在国による主効果 ($F(2,155) = 4.28, p < .05$) が認められた。多重比較を行った結果、日本帰国生に比べアメリカ帰国生の方が現在の韓国の学校の教室文化を強制されることに對し、より多くのストレスを感じている傾向 ($p < .01$) が示された。第三に、『帰国体験への否定的評価』においては、性別による主効果 ($F(1,154) = 4.05, p < .05$) が認められた。この結果から、男子に比べ女子の方がより多くのストレスを感じていることが分かった。

6 考察

本研究により韓国におけるアメリカ・日本・中国帰国生の学校生活におけるストレスの構造としては、『学業困難』『教師への不満』『友人との不和』『教室文化への強制』『帰国体験への否定的評価』の5因子が抽出された。また、滞在国と属性要因によるストレスの差異について検討した結果、『教師への不満』『帰国体験への否定的評価』においては、滞在期間が36ヶ月以上の帰国生の方が36ヶ月未満の帰国生より多くのストレスを感じており、『教室文化への強制』においては、日本帰国生に比べアメリカ帰国生の方がより多くのストレスを感じていることが明らかとなった。さらに、『友人との不和』においては、中国帰国生に比べアメリカ帰国生の方がより多くのストレスを感じており、『帰国体験への否定的評価』においては、男子に比べ女子の方がより多くのストレスを感じている傾向が示された。以下では、朴 (2010, 2011) と本研究の結果を照らし合わせながら、ストレスの構造及び滞在国と属性要因によるストレスの差異について考察する。

6-1 ストレス構造に関する考察

アメリカ・日本・中国帰国生のストレスの因子構造の特徴としては、『帰国体験への否定的評価』が新たに抽出されたことが挙げられる。これは、帰国生の滞在国を制限しなかつた朴 (2010) のストレスの因子構造としては抽出されなかつたものであり、朴 (2011) の質的分析で得られたアメリカ・日本・中国帰国生に共通する研究結果を支持するものである。この結果から、三カ国からの帰国生は共通して学校の教師と友人の理解不足や偏見により帰国体験を否定的に評価されることをストレスと感じていることが示された。また、本研究では朴 (2010) で抽出された『規則遵守への強制』に「先生が語学の授業中に友だちの前で教科書を読ませた」の項目が加わり、因子名を『教室文化への強制』とした。このことから、三カ国からの帰国生の滞在国の言語である英語、日本語、中国語は第二言語、第三言語として語学の授業中に使用されており、その際に教師の指示によって大勢の生徒の前で教科書などを読まされる現状があり、帰国生はそれをストレスと感じていると推察できる。つまり、帰国生は自分の意思は問われずに学校の規則を守るよう、滞在国の言語を発するように教師側から強制されることに對

しストレスを感じているといえる。

6-2 滞在国によるストレスの差異

滞在国別のストレスの差異としては、アメリカ帰国生と中国・日本帰国生の間に差異が認められた。まず、アメリカ帰国生が中国帰国生より『友人との不和』において多くのストレスを感じていることが明らかとなった。これは、朴（2011）の質的研究の結果からは明確にされず、量的な調査を行った本研究独自の結果といえる。この結果の背景には、韓国社会においてアメリカ帰国生がとりわけ注目される現状がある。韓国では大学への進学率が異常に高い（文部科学省，2008）ことから、受験競争が激しく、現在の入試制度では英語偏重の傾向があることから、それに伴い友人関係においてアメリカ帰国生の英語能力が注目され、入試においてもライバル視されやすいと考えられる。そこから、アメリカ帰国生に対する周囲の過剰な関心や憧れも然ることながら、その裏返しとして友人からの嫉妬やいじめなども中国帰国生より多く経験している可能性がある。その例としては、学校の友人のアメリカ帰国生に対する高い英語能力の当然視、不良学生などというアメリカ帰国生に対する偏見（朴，2011）などが挙げられる。

次に、アメリカ帰国生が日本帰国生に比べ『教室文化への強制』において多くのストレスを感じていることが分かった。このような結果に関しては、これまでも韓国の学校でアメリカ帰国生が体罰に反発する事例（Roh, 2003）や教師により学校の規則を守るように強いられることに対する不快感（朴，2011）などが報告されている。さらに、この結果の背景には米韓の教室文化は相違点が多く、それに比べ日韓の教室文化は比較的類似していることがあると考えられる。特に、同じ東北アジア文化圏である日韓では制服、髪型、時間厳守などの学校規則が類似している（Yee, 2008）が、アメリカではそのような学校の規則が比較的自由であったため、日本帰国生に比べアメリカ帰国生は納得できない教室文化を守るように強いられることにより多くのストレスを感じるといえる。また、英語は中学・高校の必修科目であることから、授業中に日本語よりも英語を言うように強いられることが多く、アメリカ帰国生の方がそれに伴うストレスも多いと考察できる。

日本帰国生については、アメリカ・中国帰国生に比べストレスが有意に多くない結果となった。朴（2011）からは、日本帰国生が韓国社会の歴史的な事柄による反日感情から、学校生活の中で日本を悪く言われることや、日本帰国であることで教師や友人との間に葛藤があると報告されており、日本帰国生は滞在国によって感じる不快な経験が最も多いことが分かった。しかし、本研究の『帰国体験への否定的評価』によるストレスにおいては、滞在国別の差異は認められず、滞在期間によるストレスの差異だけが有意に多い結果となった。このような結果は、学校生活において日本帰国生が滞在国に関することによる不快な経験は多くしているものの、一方で、韓国ではそのような批判的な情緒とともに日本の先進性に対する評価は高く、アンビバレントな視点が共存している（加賀美常美代・守谷智美・岩井朝乃・朴志仙・沈貞美，2008）ことがその背景としてあるのではないかと考えられる。

また、中国帰国生も、アメリカ・日本帰国生に比べストレスを有意に多く感じていない結果となった。朴（2011）によると、中国帰国生は周囲からの特別入試に対する差別や中国を批判されたり、蔑視されたりすることによって不快な経験をしていることが明らかになったが、本研究の結果からは、学校生活においてほかの二カ国に比べストレスを多く抱えていないことが分かった。そこには、中国帰国生が韓国内であまり注目されていないことが影響しているのではないかとと思われる。つまり、『友人との不和』において、中国帰国生はアメリカ帰国生に比べストレスが少ないという結果になったのは、韓国内でのアメリカと中国に関する関心度とも関連があり、アメリカと比べ中国に対する周囲の関心の低さ（Lee, Choi & Choi, 2010）が反映されていると考えられる。

6-3 属性要因によるストレスの差異

属性要因別のストレスの差異としては、滞在期間と性別による差異のみが認められた。まず、滞在期間によるストレスの差異については、第一に、『教師への不満』において滞在国別のストレスの差異は認められず、滞在期間が36ヶ月以上の帰国生の方がストレスが有意に多い結果となった。つまり、滞在国に関わらず滞在期間が36ヶ月以上と比較的海外生活が長い帰国生は、滞在国の学校の教師との関係に慣れているため、帰国後滞在国とは異なる教師との関係からよりストレスを感じるのではないかと考察できる。第二に、『帰国体験への否定的評

価』においても滞在国別のストレスの差異は認められず、滞在期間が36ヶ月以上の帰国生の方がストレスが多かった。このことから、滞在期間が36ヶ月以上の帰国生はどの滞在国からの帰国生であっても自身が生活していた国やその人々に対し愛着をより強く持つようになることが考えられる。つまり、帰国生にとって成長過程の一時期を過ごし、自身が育てられた滞在国やその人々は特別な意味をもつため、周囲からそれらを否定されると当然ストレスを受けるのであろう。また、どの帰国生も滞在国から現在までの苦労は理解されず、現状のみで判断されることからストレスが生じるといえる。このように、滞在期間によってストレスに差異が認められた本研究の結果は、これまで帰国生のストレスに滞在期間が関連するとしている先行研究（箕浦, 1985 ; 森吉, 1999）を支持するものである。

次に、性別によるストレスの差異としては、『帰国体験への否定的評価』において男子より女子の方が多くのストレスを感じていることが明らかとなった。これは、女性は社会的拒絶において男性よりストレスを感じる（山田, 2010）ことや、日韓ともに女子高校生の方が日常ストレスが有意に多い（榊原・村松・吉田・佐藤・村松・金子・平野, 2003 ; Seo & Kim, 2006）とする成人や一般の生徒を対象とした研究結果と一致する。一方、帰国小学生においては性別による日常ストレスの差は認められない（Park, 2003）とした研究結果とは異なる結果となり、そこには小学生と中高生の年齢の違いが影響していると考えられる。また、韓国の帰国中学生を対象とした研究によると、適応は女子帰国生の方が優れている（Lee, 2009）とされており、これを本研究の結果を照らし合わせて考えると男性と比べ女性の方が適応には優れているものの、それに伴うストレスは多く感じていることが窺える。

7 まとめと今後の課題

本研究の結果、アメリカ・日本・中国帰国生の滞在国によるストレスの差異が認められたのは『友人との不和』『教室文化への強制』であった。つまり、アメリカ帰国生は一般生との友人関係、学校の規則や授業中の慣例について、それぞれ日本・中国帰国生よりストレスが多い傾向が示された。帰国生のストレスは韓国の学校が帰国生をどのように受け止めているかに深く関連していることから、韓国の学校ではアメリカ帰国生がほかの二カ国からの帰国生より周りから注目されやすく、期待されやすいのではないかと考えられる。また、韓国社会の中での日本と中国に対する関心や位置づけも日本・中国帰国生のストレスに影響しているといえよう。以上のとおり、韓国における帰国生のストレス構造と滞在国別のストレスの差異を論じてきたが、本研究は限られた滞在国からの帰国生を対象としており、滞在国別の対象者の数にもばらつきがあることから、過度な一般化はできない。従って、今後は対象を拡大して調査することで更なる教育的知見が得られると考える。また、滞在期間においては36ヶ月が分水嶺でストレスに差異をもたらす結果となったが、先行研究（箕浦, 1985 ; 森吉, 1999）からは滞在期間が4、5年以上の帰国生の場合にストレスが多いとしていることから、滞在期間について今後も検討する必要がある。さらに、帰国生の学校生活をより多角的に明らかにするために、帰国後のストレスに関連する要因の背景となるそのほかの要因についても更なる研究を行うことが必要だと考える。

註

- 1 韓国では、近年親の海外勤務に同行した児童とともに早期留学（小学校・中学校・高校の生徒の留学、親が同伴する場合と生徒単身の場合がある）のために出国し帰国する子どもも増加している（韓国教育開発院教育統計センター2008年度資料原因別出国現状）ことから、この出国形態をも含めて帰国生と定義する。そのため、本研究における帰国生の定義は「親の海外勤務や留学及び児童自身の留学のために海外で1年以上学校に通った後に帰国し、韓国の学校に在籍している帰国後8年までの生徒」とする。
- 2 韓国の帰国生の滞在国及び滞在地域の詳細をみると、1位がアメリカ（6,830名）、2位が東南アジア諸国（3,726名）、3位が中国（3,635名）であり、その他にオセアニア・ヨーロッパ諸国、中東やアフリカ諸国も見受けられる（2008年度韓国教育統計）。
- 3 日本からの帰国生数は、ここ数年間500人前後を維持している（2008年度韓国教育統計）。
- 4 米国からの帰国生12名、日本からの帰国生14名、中国からの帰国生6名を対象としている。
- 5 詳しくは、朴（2011）を参照されたい。
- 6 現在の学校のストレスに関しては、一般生の中学生用学校ストレス尺度（岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992）を基に、「先生が滞

在国や滞在国の人々を悪く言った」「授業で用いる韓国語が分からなかった」などの韓国の帰国生を対象とした予備調査から得られた11項目を加え、全38項目を作成した。評定方法は、各項目について「経験頻度」と「嫌悪性」を求め、ともに0～3の4段階評定を用い、「経験頻度×嫌悪性」を指標とした。「経験頻度」と「嫌悪性」がともに1以上であれば、その出来事は生徒にとって何らかのストレスャーとなっていると考えられる(岡安ら, 1992)。詳細は朴(2010)を参照されたい。

<参考文献>

- 加賀美常美代・守谷智美・岩井朝乃・朴志仙・沈貞美(2008)「韓国における小・中・高・大学生の日本イメージの形成過程」『異文化間教育』28号 異文化間教育学会 60-73
- 菊住彰(2007)「ストレスとコーピング」『コミュニティ心理学ハンドブック』日本コミュニティ心理学会編 194-204
- 榎原麻衣・村松常司・吉田正・佐藤和子・村松園江・金子修己・平野嘉彦(2003)「高校生のストレス対処行動とセルフエスティーム」『教育医学』49(3)、208-221 日本教育医学会
- 朴エスター(2010)「韓国における帰国生の学校生活のストレスと関連要因」『異文化間教育』32、80-97 異文化間教育学会
- 朴エスター(2011)「韓国の帰国生の学校生活における不快な経験の滞在国別比較ーアメリカ・日本・中国からの帰国生を中心にー」『お茶の水女子大学人間文化創成科学論叢』13、127-136
- 布施晶子(2000)「帰国子女の帰国後の不適応に関する研究ー外国在住の日本人家族を取り巻く調査結果ー」早稲田大学大学院文学研究科紀要46(1)
- 文部科学省(2008)「教育指標の国際比較平成20年版」
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/08030520/004.htm 2011年8月29日閲覧
- 箕浦康子(1985)「海外育ちの子どもの学校ストレス」安藤延男編『学校社会のストレス』垣内出版 298-318
- 箕浦泰子(1984、2006)『子どもの異文化体験』思索社 127-169
- 森吉直子(1999)「Developing the third eye 適応とは何かー第三の視座の萌芽 帰国生の事例から」東京学芸大学海外子女教育センター研究紀要10、29-49
- 山田茂人(2010)「ストレス反応の男女差」精神経誌112(5) 516-520
- Dalton, J., Elias, M.J., & Wandersman, A.著、笹尾敏明訳(2007)「コミュニティ心理学」金子書房 278-325
- Jeong, Jae-Ok & Joo, Eun-Sun(2003)「海外帰国青少年の学校生活適応の特性に関する研究ー質的分析を通じた帰国中学生の経験の把握を中心に」徳聖女子大学『韓国心理学会誌』15(2) 329-351
- Kim Hyo-Ki(2002)「ストレス、対処、事故効力感及び社会的支持が帰国児童の適応に及ぼす影響」忠南大学教育大学院 2001年度修士論文
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. (1984) *Stress, appraisal, and coping*, New York : Springer Publishing.
- Lazarus, R. S., & Folkman, S. 著、本明寛・春木豊・織田正美監訳(1991、2007)『ストレスの心理学』実務教育出版 25-52、183-231
- Lee Hyun-ju(2009)「青少年の海外留学経験とアイデンティティ及び学校生活の適応との関係」梨花女子大学教育大学院 2008年度修士論文
- Lee, Myoung-Jin, Choi, Yu-Jung & Choi, Set-Byol(2010)「多文化社会と外国人に対する社会的距離」『調査研究』韓国調査研究学会 11(1) 63-85
- Park Hye-sook(2003)「海外帰国学生の適応ストレス有形と対処方案」高麗大学教育大学院 相談心理専攻 2003年度修士論文
- Roh Kyung-Joo(2003)「帰国生徒の人生に関する自然主義的理解と教育的課題」児童権利研究7(2) 韓国児童権利学会 365-366
- Seo Ji-Yeong & Kim Mi-Ye(2006)「高校生のストレスと身体症状及びコーピング」韓国児童看護学会誌12(4) 470-477
- Yee Jong-Seung(2008)「海外帰国生青少年の海外生活満足度と文化志向態度が学校生活適応に及ぼす影響」カトリック大学 心理相談大学院 2008年度修士論文
- Yoon, MiRa(2006)「帰国生の不安・うつに関する研究ー特別学級の学生を中心にー」延世大学教育大学院 外国語としての韓国語専攻 2006年度修士論文